信仰なき者の信仰

大 石 健 一

奨励者紹介〔おおいし・けんいち〕
日本キリスト教団茨木春日丘教会牧師

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。
（ヘブライ人への手紙 11章1節）

私は1992年に神学部に入学し、1996年に卒業いたしました。今回、丸々20年ぶりに神学館の礼拝堂に入りました。こうした機会を備えてくださったことに感謝の意を表したいと思います。次回があるのかどうか私が決めることではありませんが、今回は私の半生を辿る形で、一つの信仰の有り様というものを語りたいと願っています。

同志社大学入学以前

私は元々、国立の医学系志望であった一方、哲学に関心を抱いていました。哲学には、キェルケゴールに代表されるキリスト教的哲学や、フォイエルバッハやニーチェが展開したアンチ・キリスト教哲学の流れがありますが、これらが面白くてたまりませんでした。また、医療の場では当時、ターミナルケアが話題となっていまして、宗教的なアプローチも注目されていました。これらが動機となり、同志社大学神学部を受験いたしました。志望校に落ちたということもありますが、予想もつかない人生も面白そうだという思いがムラムラと沸き起こりまして、どういうわけか、気づいたら他をキャンセルして神学部に入学していました。

神学部入学後

入学後、哲学科の授業を多く取りました。現在でも、神学部では必修科目が1科目（2単位）のみで、ほかは個人の興味に合わせて独自に組むことができるという制度があると思いますが、その恩恵を活用することができました。ニーチェの時代洞察を初めとして、理性による時代克服に否定的なリオタールと、他方、理性に肯定的なフランクフルト学派第2世代で、コミュニケーション理論を提唱したハーバーマスとの対話など、ゾクゾクするほど心躍るものでした。図書館が閉館する夜の10時まで勉強して、終わった後は「天下一品」の今出川店にて餃子定食を食べて帰る、というのが、私の神学部での日課でした。あんなにワクワクした日々はありません。当然、組織神学を選んでおいてカントかヘーゲルでもやろうと考えていたのですが、田中剛二という改革派の牧師であり神学者（新約聖書学）の聖書講解に魅了され、新約聖書学を専攻して今に至るという次第です。

在学中、現在は教団を離脱した教会で洗礼を受けました。母教会の牧師は教団紛争時代にカナダに移住し、現地の福音派の神学校で学んだ方でしたので、当然、教会は福音派的です。しかし、福音派の

考えに自分はとても馴染めませんでした。その一方、同志社大学神学部は、福音派とは対極的な位置にあると言えます。正統主義的な神学を学ぶ必要を感じたことも理由の一つですが、両者の間に立たされて股裂き状態のような痛みも耐え難く、何よりすべてを一新したいという気持ちが強く、加えて、母教会が教団を離脱するというタイミングであった中、大学院は同志社ではなく、東京神学大学を選んで再スタートを切りました。卒業後は牧師をし、米国に留学もして、現在は、広島大学の博士課程後期課程で博士論文を書きつつ、牧師業の傍ら、関西学院大学で非常勤講師をしています。

信仰的な悩みとの格闘

ここから話の佳境に入ってまいりますが、私は、たとえば幽霊を信じるというのと同じ形で、神はいると感じたことはありません。勿論、否定するつもりもありませんが、神の存在を感じたことで確信するという次元の信仰を、私は今に至るまでもつことはできていません。当然、洗礼を受ける時に悩みました。特に、牧師の道を選ぶ時、大いに悩みました。これでいいのだろうか、と。しかし、キリスト教という文化と信仰の形を継承し、それをもって世界に寄与することを自分の人生の使命とする、という軸は、今でもブレていません。今は見えていなくても、見えないものを追い求めることもまた一つの信仰であると考え、歩みを進める決心をしました。

とはいえ、やはり申し訳ないと心苦しくなる時はあります。そんなある日、こんなエピソードを私に語ってくれた人がいました。それは、ハンナ・アーレントという女性の哲学者のことです。彼女はドイツ生まれのユダヤ人で、ナチズムが台頭した時代にフランス、次にアメリカへと亡命した思想家です。ナチズムやスターリニズムに代表される全体主義の構造と、それをもたらす人間の分析をしたことで知られています。彼女の尽力が認められ、ユダヤ人たち、そしてラビからも感謝されたそうです。その時彼女は、自分はユダヤ教の神をまともに信じているわけではないこと、それゆえに自分には信仰と呼ぶべきものはなく、心苦しく感じていることを吐露しました。するとそのラビは、自分に危険が及ぶような中で、自分を犠牲にすることも厭わず、ユダヤ人と人類のために尽くしたこと、それこそ信仰に他ならないと述べたそうです。私はこのエピソードを聞いて、四半世紀の間抱えていた心の詰まりが、スッと取れたような安堵感に満たされました。

これからの課題

唯一絶対神教がもつ普遍性と、多元的な世界との相関関係をいかにして保つか。相矛盾し、衝突もする両者の関係を整理して、私たちの現代社会に新しい信仰を提示していく課題があると信じています。しかし、その実現は容易なことではありません。そうした中で、普遍性を保持するゆえに排他的にもならざるを得ない要素を孕む、教会が従来提示してきた信仰の形を、無批判にそのままの形で、受け入れることも示すわけにもいかず、格闘している方も多いと思います。けれども、私たちの時代、そして、私たちの時代を導く神は、この理論的には不可能とも思える課題に取り組み、格闘し、キリスト教を新しい形で世界に提示する働きに従事する人材を求めていると信じています。教職員の方々や学校関係の方々、そして、学びを続けておられる学生の皆さんと、ご一緒にこの課題に取り組むことができるなら、こんな幸いはありません。

最後に一言。私を育んでくださった同志社大学で、このような形で、以上の事柄を語ることができましたことに、万感胸に迫る思いです。

2016年6月21日 今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録